

## 歴史学の営みと史料

1-1

### 歴史学の営み

歴史学の核となる、最も重要な営みとは何だろうか、一言で言えばそれは自らの歴史像を提示する(=生産する)ことである。そのためには次の4つの作業ステップを踏む必要がある。

作業1 過去への「問い」 →自らの何らかの関心に基づいて、過去に対する問いを立てる。

作業2 事実の認識 →関連する資料を通じて、過去の諸事実を認識(特定・確認)をする

作業3 事実の解釈 →その諸事実を組み合わせ、その時代における意味を考える(解釈する)ことによって、歴史の部分像を描く。

作業2・作業3を繰り返す作業

作業4 歴史像の提示 →歴史の部分繋げ、最初の問いに答えるような、より全体的な像を描き、オリジナルな成果として論文・書籍などの形で発信する。

この作業1から4を具体的にイメージできるように作業モデルを提示する。

(鉄砲の伝来)

→作業1「鉄砲伝来は日本国内にどのような影響を及ぼしたのか」という問いを立てる。

→作業2 関連資料に基づき、

a「1570年、堺が織田信長の直轄地となった」、

b「1573年、堺の豪商千利休が織田に鉄砲の弾1000個を送った」

などの事実を一つ一つ認定する。

→作業3 特定した事実同士の間関係を考え「信長は鉄砲や火薬を扱う堺の商人を支配下に置き、軍備を充実させた」と解釈する(=歴史の部分像を描く)。

→作業4 作業2・3を繰り返すことで得られた歴史の群像を組み合わせ、「鉄砲伝来は、織田信長の軍備を近代化させ、日本統一事業の推進力の1つとなった。それは日本の、ひいては東アジアの軍事革命の端緒となった」という歴史像を構築・提示する。

→作業1~4を並行して さらにもう一つ、必ず行うべき重要な作業がある

それは先行研究(従来研究)の調査・確認である。

学問の世界では 既知の上に未知を開拓することが求められる。

このため、すでに何が明らかにされていて、自分の研究はそれとどのように違うかが、明確にわかる形で成果を発信しなくてはならない。

これは歴史学に限らず、すべての学問に共通するルールである。

なお「先行研究が全くないテーマ」と言うものは、実のところ、そう滅多にあるものではない。

このため多くの研究は、100%新しい歴史像を生み出すと言うよりは、先行研究が示した歴史像にある程度影響しつつ、論的な反論・修正・補足を行う(=新たな知見を加える)ものとなっている

そして、それでも歴史学では十分にオリジナルな研究成果だとみなされるのである。

## 過去の事実と史料批判

歴史学の営みの中で資料(過去の痕跡)と最も関わりが深いのは作業2である

この作業では「いつ、どこで、人やものが、どうであったのか」と言う過去の事実をできるだけ「正しく」「認識(特定・確認)しなくてはならない。「正しく」といっても、過去を直接見ることはできないので、「なるべく多くの人々が納得出来るように」かつ「誰にでも検証できる形で」と言う意味である。

そしてその「正しさ」を支えるのは資料なのである。

とは言え、資料があればそれでよしと言うわけではもちろんない。そもそもそれは本物の資料なのだろうか(偽物ではないだろうか)。仮に本物だとしてもオリジナルな姿のままなのだろうか(欠損したり改ざんされたりしていないだろうか)あるいは文字で書かれた資料の場合、書き手の誤解、嘘や誇張、妄想が含まれているかもしれない。いつ、どこで、誰が書いたのか、直接の情報か間接の情報か、どのような状況下でいかなる思想や信仰に基づいて書かれたのかといった点によっても、記述の性格は変わってくる。

そこで、こうした疑問の疑惑を出来る限り払拭し、事実を「正しく」認識するためには、資料を鵜呑みにせず、一つ一つの価値を吟味し、信憑性、有効性を見極める資料批判と言う作業が不可欠となってくる。

さらに、この資料批判を的確に行うためには、時代状況、史料上の言語、書体、度量衡、暦法、地理等についての知識も身につけてはならない。大学で専門的に歴史を学ぶ場合には、通常まずこの知識(特に語学力)の習得にかなりの時間と労力を割くことになる。

ところである過去の事実について資料が全く残っていなかったら、その事実は無視できるのだろうか

できないのである。このような場合、

そのその事実が過去に確かに存在したとしても、現在、私たちはその事実を認識できない、歴史学では、こうした事実は研究の対象にならない。

つまり歴史学の対象となり得るのは、過去の事実の全てではなく、認識可能な(誰でも納得できる形での事実を認識しうるに足る資料は存在する)事実に限定されるということになる。そしてその存在を前提とした上で、実際に認識された事実が、作業3=事実の解釈の対象となるのである(要するに「全ての事実>認識可能な事実>認識された事実」となる)

### 1-2 歴史像と史料

歴史像の在り方

歴史学と「現在」

## 2 歴史学の「歴史」と史料

### 2-1 前近代の歴史叙述

歴史叙述のはじまり 1：オリエントとイスラエル

歴史叙述のはじまり 2：ギリシャと中国

### 2-2 近代歴史学の成立と展開

近代歴史学と史料

近代歴史学と日本

近代歴史学の問い直し -- 社会史と言語論的転回

## 3 狭義の史料と抗議の史料

文字史料と歴史学

史料の多様化

歴史学の細分化

横断的・学際的研究の進展

史料は過去の事実にアクセスするための唯一の「回路」である。

しかし、どんな史料からも過去の事実そのものを見る／知ることはできない。

史料が伝えてくれるのは極めて限定的で不完全な「過去」である。

その制約とはがゆさに、しばしば昔の人に本気で、電話したくなるほどである。

それでも資料という小窓から、間接的／部分的に過去の事実を見出し、その意味を考え、思考や推測力を駆使して歴史像を描く作業（＝歴史学の営み）は、その労苦に見合うだけの、知的刺激に満ちた過程である。

そうした歴史像の根拠となった史料も見てほしい（幸いインターネットの発達・普及で、それはかなり容易となった）

それを繰り返すことで、“**歴史学的に見る・考える**”力は養われ、鍛えられていく。